Encounter with Stradivari

ストラディヴァリウス・コンサート

2023

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

©Xenie Zawistdaya

マリア・ドゥエニャス
María Dueñas

©Kristian Schuller

パブロ・フェランデス
Pablo Ferrández

©Kumiko Kobayashi

江口 玲
Akira Eguchi

©Sophie Williams

キム・スーヤン
Suyoen Kim

Encounter with Stradivari

ストラディヴァリウス・コンサート

2023

日本音楽財団 NIPPON MUSIC FOUNDATION　Izumi Hall　社会福祉法人日本ライトハウス　日本製鉄文化財団

親愛なる皆さまへ

ヴァイオリニストのスーヤン・キムとマリア・ドゥエニャス、ピアノの江口玲、そしてわたくし、チェリストのパブロ・フェランデスがお届けする、類まれな「ストラディヴァリウス・コンサート 2023」へ、ようこそお越しくださいました。

とても有名なラフマニノフの「ヴォカリーズ」は、もとは声楽のために作られた曲です。チェロは人の声と非常によく似た音域を持っているため、チェロでの演奏に特に合っていると思います。私はラフマニノフの音楽全般を演奏するのが好きで、私の最初のアルバム「リフレクション」で、彼の作品を自分の楽器のために録音することに決めたのも、そうした理由からです。特にこの曲は、とても親密な感情をもたらしてくれるので、コンサートのオープニングにふさわしいと思います。グループで瞑想するように、みんなを一つにしてくれます。私はいつも、このようにゆったりとした美しい曲でリサイタルを始めるのが好きです。なぜなら、私たちはあまりにストレスの多い活動的な世界に生きているため、聴衆の皆さんが仕事や日々の生活を終えてようやくコンサートホールに到着した時には、あらゆるストレスを持ち込まずに、美しいメロディーに身をゆだね、気持ちを楽にしてコンサートに入っていただきたいという考えがあるからです。

ピアノ三重奏曲「街の歌」はベートーヴェンの絶対的な傑作で、とても魅力的で生命力に満ちており、コンサートの冒頭と好対照を成していると思います。ベートーヴェンの最初期の作品にもかかわらず、彼の技量の全てが表されています。この曲にまだ馴染みのない方にとっても、この曲がベートーヴェン作品の中で最もお気に入りの一曲になることをお約束します。

次の曲、ラヴェルの「ツィガーヌ」で気分を切り替えましょう。ヴァイオリンの大ヒット曲の一つであり、情熱と妙技に満ちたこの曲は、マリアの持ち合わせる感性と合わせて間違いなく聴衆の皆さんを驚かせることでしょう。

「ツィガーヌ」で花火を打ち上げた後、私たちは古典のレパートリーに戻ります。ベートーヴェンだけでなく全てのヴァイオリン曲において重要な作品の一つであるソナタ「春」には全てが詰まっており、巨匠の才能が最大限に発揮されている欠点の一切ない宝石です。

ここまで非常に明るい音楽が続きましたが、ここで、暗く、感情を大きく揺さぶられる、記念碑的なチャイコフスキーのピアノ三重奏曲の第１楽章を組み入れました。私が最も好んで演奏する一曲で、なぜなら、この曲は音色やヴィブラートを使った様々な表現を探求する余地を多く与えてくれるからです。チャイコフスキーのまさに天才的な作品です。

劇的なチャイコフスキーの後は、ショスタコーヴィチの心地良い曲で緊張をほぐしたいと思います。おそらく皆さんが良く知っているショスタコーヴィチとは異なる一面であり、いつしか音楽のカクテルのように寄り添い皆さんを楽しませてくれることでしょう。

そして、最後のコルンゴルトは、二つのヴァイオリン、チェロ、ピアノのために書かれた極めて少ない作品の一つで、非常に複雑ですが、努力する価値のある一曲です。

最高にゴージャスだと確信している音楽のセレクションを聴衆の皆さんにお楽しみ頂けることを願っています。私の仲間たちと一緒に、皆さんを音楽の旅へお連れするのが待ちきれません。

チェリスト　パブロ・フェランデス

Our dearest friends,

Welcome to a unique journey of Encounter with Stradivari 2023 joined by Suyoen Kim, María Dueñas, violinists, Akira Eguchi, pianist, and me Pablo Ferrández, cellist.

The very famous Rachmaninov Vocalise which was originally conceived for voice, I think it works specially well for cello since cello has a very similar range of sound to the human voice. I have always liked to play Rachmaninov music in general, that's why on my first album "reflections" I decided to record most of his music for my instrument, I think this piece in particular offers a very intimate feeling that works great for the opening of a concert, it kind of brings everyone together, like a group meditation, I usually like to start recitals like this, with a slow beautiful piece, my idea behind it is that we live in such a stressful and active world that when our audience finally gets to the concert hall after work or from their daily life, they can immediately leave all that stress at the door and relax into the beautiful melodies and ease themselves into the concert.

The Gassenhauer trio, an absolutely master work from Beethoven, so charming and full of life, I think it offers a great contrast with the opening of the concert. Beethoven really shows all his skill although being a very early composition of his. For our audience that are not yet familiar with this piece I can guarantee it will become one of their very favorite Beethoven pieces.

We switch gears with the next piece of the program Ravel Tzigane, one of the "big hits" of violin playing, full of passion and virtuosity qualities that María absolutely possesses, this piece will definitely wow the audience!

After the fireworks of Tzigane we go back to the classics, to one of the key pieces of not only Beethoven, but the whole violin repertoire, the Spring sonata has it all, an absolute jewel that shows the great master's genius in full potential.

So far until here we had quite a luminous selection of music, and I chose to incorporate the first movement of the monumental Tchaikovsky piano trio which is a much darker, and highly emotionally charged piece. It happens to be one my most favorite pieces to play, because it gives us so many possibilities to search for colors in the sound and different kind of expressions with the vibrato, absolutely genius music by Tchaikovsky.

After the drama of Tchaikovsky, we take down the tension with some delicious pieces by Shostakovich, perhaps a different side of Shostakovich that our audience might be familiar with, getting at some points close to "cocktail" music will make the delights of the audience.

And finally, Korngold, one of the very very few pieces written for 2 violins, cello and piano, quite complex music but worth the effort!

I hope that our audience will enjoy this selection of what I believe is absolutely gorgeous music and can't wait to, together with my colleagues bring the audience in this musical journey.

Pablo Ferrández, cellist

PROGRAM

セルゲイ・ラフマニノフ　Sergei Rachmaninov

ヴォカリーズ 作品 34-14　Vocalise Op.34-14

パブロ・フェランデス（チェロ）　Pablo Ferrández, cello
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン　Ludwig van Beethoven

ピアノ三重奏曲 第 4 番 変ロ長調 作品 11《街の歌》
Piano Trio in B Flat Major Op.11 “Gassenhauer”

I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto

キム・スーヤン（ヴァイオリン）　Suyoen Kim, violin
パブロ・フェランデス（チェロ）　Pablo Ferrández, cello
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

モーリス・ラヴェル　Maurice Ravel

ツィガーヌ　Tzigane

マリア・ドゥエニャス（ヴァイオリン）　María Dueñas, violin
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

休 憩　Intermission

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン　Ludwig van Beethoven

ヴァイオリン・ソナタ 第 5 番 ヘ長調 作品 24《春》から第 1 楽章
Violin Sonata in F Major Op.24 “Spring”

I. Allegro

キム・スーヤン（ヴァイオリン）　Suyoen Kim, violin
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー　Pyotr Ilyich Tchaikovsky

ピアノ三重奏曲 イ短調 作品 50《偉大な芸術家の思い出に》から第 1 楽章
Piano Trio in A Minor Op.50 “In memory of a great artist”

I. Moderato assai – Allegro giusto

マリア・ドゥエニャス（ヴァイオリン）　María Dueñas, violin
パブロ・フェランデス（チェロ）　Pablo Ferrández, cello
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

ドミートリ・ショスタコーヴィチ　Dmitri Shostakovich

2 つのヴァイオリンとピアノのための 5 つの小品
5 Pieces for 2 Violins and Piano

No.1 Prelude
No.2 Gavotte
No.3 Elegy
No.4 Waltz
No.5 Polka

キム・スーヤン（第 1 ヴァイオリン）　Suyoen Kim, 1st violin
マリア・ドゥエニャス（第 2 ヴァイオリン）　María Dueñas, 2nd violin
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

エーリヒ・ウォルフガング・コルンゴルト　Erich Wolfgang Korngold

2 つのヴァイオリン、チェロ、左手のためのピアノによる組曲 作品 23 から第 2 楽章、第 3 楽章
Erich Wolfgang Korngold : Suite for 2 Violins, Cello and Piano (left hand) Op.23

II. Walzer. Nicht schnell, anmutig
III. Groteske. Möglichst rasch

マリア・ドゥエニャス（第 1 ヴァイオリン）　María Dueñas, 1st violin
キム・スーヤン（第 2 ヴァイオリン）　Suyoen Kim, 2nd violin
パブロ・フェランデス（チェロ）　Pablo Ferrández, cello
江口 玲（ピアノ）　Akira Eguchi, piano

曲目解説

セルゲイ・ラフマニノフ：ヴォカリーズ 作品 34-14

「ヴォカリーズ」とは、歌詞ではなく母音で歌うことです。音楽の授業で「あ〜〜」と発声練習した経験のある方も多いことでしょう。そうした歌い方を、単なる発声練習から至極の名曲にまで高めたのが、ロシア出身の作曲家でピアニストとしても大活躍したセルゲイ・ラフマニノフ（1873 〜 1943）です。

ラフマニノフらしい —— たとえば有名な《ピアノ協奏曲第 2 番》に典型的な——歌心あふれる、そしてどこか哀愁漂う旋律は、この曲でも健在です。その旋律は、ラフマニノフがこの曲を発表する前に、あるソプラノ歌手に歌ってもらい、彼女からの助言を受けて完成させたものだといいます。ピアノも単に和音を刻んでいるようで、息の長い旋律線を支え、徐々にそこに絡み合う旋律を加えていきます。この歌曲は 1915 年に作曲されるとすぐに人気となり、さまざまな楽器用に編曲されて親しまれてきました。今回はチェロとピアノのヴァージョンでお聴きいただきます。

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲 第 4 番 変ロ長調 作品 11《街の歌》

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770 〜 1827）は、交響曲やピアノ・ソナタ、室内楽に宗教曲と、多くのジャンルに傑作を残した作曲家です。それらはさまざまな書法で書かれていますが、彼が得意とした書法のひとつに「変奏」があります。この曲の第 3 楽章は、ヨーゼフ・ヴァイグルの喜歌劇《船乗りの愛》の〈私が仕事にとりかかる前に〉という旋律にもとづく 9 つの変奏曲で、ここにシンプルな旋律を多彩に展開してゆくベートーヴェンの手腕が見てとれるでしょう。この旋律が当時大人気だったことから、「街の歌」（＝流行歌）というタイトルで呼ばれています。その前には、決然としたユニゾンのモティーフが印象的な第 1 楽章、ゆったりした優雅な第 2 楽章が置かれています。

この作品は 1797 〜 98 年に作曲され、1798 年に出版されました。もともとはピアノ、クラリネット、チェロのために書かれた曲ですが、初版のタイトル・ページに「クラリネットまたはヴァイオリン」とあるとおり、今回お聴きいただくようなヴァイオリンでの演奏も作曲者が想定したものです。

モーリス・ラヴェル：ツィガーヌ

「ツィガーヌ」は、フランス語でロマを意味します。スペイン国境に近いフランス南西部の港町に生まれ、パリを中心に活躍したモーリス・ラヴェル（1875 〜 1937）は、なぜ異国の題材で作曲したのでしょうか。そのきっかけは、ハンガリー出身のヴァイオリニスト、イェリー・ダラーニとの出会いでした。あるときダラーニが弾いたジプシー音楽は、彼女の煽情的な演奏とも相まってラヴェルを魅了。彼はそのインスピレーションをもとに 1924 年にこの小品を作曲し、ダラーニに献呈しました。

曲はヴァイオリン独奏による長い序奏で始まります。ジプシー音楽の特徴である増音程や頻繁なテンポの変化が印象的に用いられています。また、ラヴェルは作曲に際し、「悪魔に魂を売ったヴァイオリニスト」と呼ばれたニコロ・パガニーニの難曲《24 のカプリース》を研究したとのこと。ヴァイオリンの急速なパッセージでの倍音奏法やピツィカートといった華やかな超絶技巧は、その表れといえます。

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第 5 番 ヘ長調 作品 24《春》から第 1 楽章

ベートーヴェンは意外に思われるかもしれませんが、「早熟の天才」ではありませんでした。たしかに10代の頃から作品を発表してはいたものの、1792 年、22 歳で生まれ故郷のボンからウィーンへ移住したのはヨーゼフ・ハイドンのもとで作曲を学ぶためでしたし、今日よく演奏される作品は 20 代後半以降に書かれたものがほとんどです。この《ヴァイオリン・ソナタ第 5 番》が作曲されたのは 1800 年、30 歳のこと。この年には《交響曲第 1 番》や《弦楽四重奏曲》作品 18 も完成させるなど、ベートーヴェンは続々と自信作を世に送り出し、一流作曲家としての地位を高めていきました。

ベートーヴェンが 10 曲作曲したヴァイオリン・ソナタのなかでとりわけ好まれている第 5 番は、ヘ長調ののびやかな旋律が魅力的な、とても美しい作品です。ここでは、ピアノとヴァイオリンという 2 つの楽器がバランスよく配置され、互いに対話を繰り広げます。なお、「春」というタイトルはベートーヴェン自身に由来するものではなく、おそらくその曲想から後世に付けられたものです。

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー：
ピアノ三重奏曲 イ短調 作品 50《偉大な芸術家の思い出に》から第 1 楽章

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840 ～ 1893）は 1882 年、「偉大な芸術家の思い出に」と題されたピアノ三重奏曲を完成させました。「偉大な芸術家」と記して彼が思いを馳せていたのは、前年の1881年に旅行先のパリで亡くなったニコライ・ルビンシテインのことです。彼は偉大な作曲家、ピアニストとして、そしてモスクワ音楽院 ── ここでチャイコフスキーも教鞭をとっていました ── の初代校長として、長らくロシアの音楽界を牽引した人物で、チャイコフスキーも親交を結んでいました。チャイコフスキーがいかにこの先輩音楽家のことを慕っていたか、そしていかにその死を悲しんだかは、この美しくも感傷的な曲調からよく伝わってきます。第 1 楽章は大規模なソナタ形式で、ピアノの分散和音に乗せてチェロが第 1 主題を提示。そしてその主題はヴァイオリン、ピアノと受け継がれ、壮大に奏でられます。

ドミートリ・ショスタコーヴィチ：
2 つのヴァイオリンとピアノのための 5 つの小品

旧ソビエト連邦時代に生きたドミートリ・ショスタコーヴィチ（1906 ～ 1975）は、時の政権に翻弄された作曲家で、圧政のもとでの葛藤は交響曲や弦楽四重奏曲にはっきりと刻印されています。ショスタコーヴィチといえばそうした “シリアスな” 作品がよく知られていますが、彼はジャズやポピュラー音楽も愛し、多くの映画音楽も手がけました。ちょうどショスタコーヴィチの時代は、映画が人気の娯楽となってゆく頃だったのです。この映画音楽やバレエ音楽は、友人のレヴォン・アトヴミヤンが作曲者の許可を得て編曲・再構成し、長年にわたっていくつもの組曲や曲集にまとめたことで、演奏会でも奏されるようになりました。

第 1 曲は〈前奏曲〉、第 2 曲は〈ガヴォット〉、第 3 曲は〈エレジー〉、第 4 曲は〈ワルツ〉、第 5 曲は〈ポルカ〉というタイトルが付けられています。ここでは陰鬱な調子は影を潜め、2、4、5 曲が舞曲ということもあり、陽気で叙情的な調子が特徴的です。

エーリヒ・ウォルフガング・コルンゴルト：
2 つのヴァイオリン、チェロ、左手のためのピアノによる組曲 作品 23 から第 2 楽章、第 3 楽章

エーリヒ・ウォルフガング・コルンゴルト（1897 ～ 1957）は、今でこそあまり演奏機会に恵まれませんが、ウィーンで「神童」として一世を風靡し、のちにハリウッドで映画音楽によって人気となった作曲家です。彼が 1930 年に「2 つのヴァイオリン、チェロ、左手のピアノ」という珍しい編成の室内楽を作曲したのは、パウル・ヴィトゲンシュタイン ── 有名な哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの兄 ── からの依頼によります。ピアニストのヴィトゲンシュタインは、第一次世界大戦で右腕を失ってしまったため、左手だけで弾ける作品を望んだのです。ただし、本日は演奏者の都合により、両手を用いて演奏されます。

この組曲の第 2 楽章は、当時のウィーンを思わせる優雅なだけではない〈ワルツ〉、第 3 楽章は粗野な強さをもったスケルツォ楽章の〈グロテスク〉です。コルンゴルトの独特な和声感のなかに、ときおり不協和音が響き、現代的なリズムを用いつつ展開されます。

解説：越懸澤 麻衣（音楽学）

キム・スーヤン
ストラディヴァリウス 1702 年製ヴァイオリン「ロード・ニューランズ」

©Sophie Williams

ドイツのミュンスター出身。デトモルト音楽大学ミュンスター校でヘルゲ・スラートに師事した後、ミュンヘン音楽大学でアナ・チュマチェンコに学び、2010年修士課程修了。2012年までクロンベルク・アカデミーで研鑽を積んだ。2003年レオポルト・モーツァルト国際コンクール優勝、2006年ハノーファー・ヨーゼフ・ヨアヒム国際ヴァイオリンコンクール優勝。これまで、マリス・ヤンソンス、クルト・マズア、エリアフ・インバル、チョン・ミョンフン、クリストフ・エッシェンバッハ等著名な指揮者と共演、室内楽では、マルタ・アルゲリッチ、ユーリ・バシュメット、チョン・ミュンフン等と共演している。ドイツ・グラモフォンのアーティストとして、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲と 2 つのロマンスを 2016 年 3 月にリリース。2018 年、ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団首席コンサートマスター就任。

Suyoen Kim
Stradivarius 1702 Violin “Lord Newlands”

Born in Münster, Germany. Kim studied at the University of Music Detmold, Münster Campus under Helge Slaatto, University of Music and Performing Arts Munich under Ana Chumachenco, as well as participated in the Further Masters Studies at Kronberg Academy until 2012. She received the 1st prizes at the International Violin Competition Leopold Mozart in 2003 and at the 2006 International Joseph Joachim Violin Competition Hannover. As a soloist, she has performed with conductors such as Mariss Jansons, Kurt Masur, Eliahu Inbal, Myung-Whun Chung, Christoph Eschenbach and as a chamber musician, with Martha Argerich, Yuri Bashmet, Myung-Whun Chung among others. As a recording artist with Deutsche Grammophon, she has released a recording of the Beethoven violin concerto and two Romances. Since 2018, she has been the first concertmaster of the Konzerthausorchestra Berlin.

ストラディヴァリウス 1702 年製ヴァイオリン「ロード・ニューランズ」
Stradivarius 1702 Violin “Lord Newlands”

イギリスのニューランズ卿（1825 ～ 1906）によって生涯大切にされていたため、現在この名前で呼ばれている。1964年から1982年にこの楽器を保管していたロンドンのヒル商会が、1973年に英国バースの古楽器名器展にて、当時のヒル商会を代表する楽器としてこのヴァイオリンを展示していた。楽器の保存状態が優れているだけでなく、その音質の良さでも知られており、以前このヴァイオリンを演奏したアイザック・スターン（1920 ～ 2001）は、自身が所有しているグァルネリ・デル・ジェスと同じパワーを感じると語ったという。

This violin was named after the owner, Lord Newlands (1825-1906), who treasured it throughout his life. While this violin was in the care of W. E. Hill & Sons of London between 1964 and 1982, it was exhibited at the CINOA Exhibit of Bath in 1973 as the most outstanding violin in the Hill Collection. According to the world virtuoso violinist Isaac Stern (1920-2001) who once played this violin, “Lord Newlands” has the same power as his “del Gesu” violins.

マリア・ドゥエニャス
ストラディヴァリウス 1710 年製ヴァイオリン「カンポセリーチェ」

©Xenie Zasetskaya

スペインのグラナダ出身。2016年からウィーン市立音楽芸術大学でボリス・クシュニールに師事している。2017 年珠海国際モーツァルト音楽コンクール、2018 年ウラディーミル・スピヴァコフ国際ヴァイオリンコンクール優勝。2021 年には、ユーディ・メニューイン国際コンクール優勝および聴衆賞受賞、ヴィクトル・トレチャコフ国際ヴァイオリンコンクールのグランプリを受賞した。また、BBC ニュージェネレーション・アーティスト 2021-23 に選ばれた。これまでにパーヴォ・ヤルヴィ指揮パリ管弦楽団、マレク・ヤノフスキ指揮ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団、グスターボ・ドゥダメル指揮ロサンジェルス・フィルハーモニックと共演した。2022年にドイツ・グラモフォンと専属契約し、マンフレート・ホーネック指揮ウィーン交響楽団との共演によるデビュー CD を 2023年 5 月にリリースした。

María Dueñas
Stradivarius 1710 Violin “Camposelice”

Born in Granada, Spain. Since 2016 Dueñas studies with Boris Kuschnir at the Music and Arts University of Vienna. Her competition victories began with the 2017 Zhuhai International Mozart Competition and 2018 Vladimir Spivakov International Violin Competition. In 2021 she received the 1st prize together with the audience award at the Menuhin Competition and the Grand Prize at the Viktor Tretyakov International Violin Competition. She was also named as a BBC Radio 3 New Generation Artist 2021-23. She has appeared with the Orchestre de Paris under Paavo Järvi, the Dresden Philharmonic Orchestra under Marek Janowski and the Los Angeles Philharmonic Orchestra under Gustavo Dudamel. In 2022 she signed an exclusive contract with the Deutsche Grammophon, in May 2023, released her debut album performing with the Vienna Symphony under Manfred Honeck.

ストラディヴァリウス 1710 年製ヴァイオリン「カンポセリーチェ」
Stradivarius 1710 Violin “Camposelice”

このヴァイオリンは、1880年代にフランスのカンポセリーチェ公爵の手に渡ったことから「カンポセリーチェ」と呼ばれている。1937年には、クレモナ古楽器名器展に当時この楽器を所有していたキューネ博士のコレクションとして展示された。日本音楽財団が購入する前は、30年間以上ベルギーのアマチュア奏者のもとで大切に保管されていた。

The name of this violin is derived from the owner, Duke of Camposelice, who was a well-known Stradivarius collector in France in the 1880s. In 1937, this violin was exhibited at the prestigious Cremona Exhibition by Dr. Kuhne who owned a collection of instruments. Nippon Music Foundation acquired it from the family of a Belgian amateur player who took great care of it for over 30 years.

パブロ・フェランデス
ストラディヴァリウス 1696 年製チェロ「ロード・アイレスフォード」

©Kristian Schuller

スペインのマドリード出身。13歳でソフィア王妃高等音楽院に入学。卒業後、クロンベルク・アカデミーにてフランス・ヘルメルソンの下で研鑽を積んだ。2015年チャイコフスキー国際コンクール入賞。これまでに、ロサンゼルス・フィルハーモニック、バイエルン放送交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、アカデミー室内管弦楽団等と、室内楽ではアンネ＝ゾフィー・ムター、ジャニーヌ・ヤンセン、ワディム・レーピン、マルタ・アルゲリッチ、ギドン・クレーメル、ユジャ・ワン等と共演している。2021年にソニークラシカルからリリースしたデビューアルバム「リフレクションズ」はオーパス・クラシック賞を受賞。2022年11月、アンネ＝ゾフィー・ムター、マンフレート・ホーネック指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団との共演によるブラームスの二重協奏曲等をリリースした。

Pablo Ferrández
Stradivarius 1696 Cello “Lord Aylesford”

Born in Madrid, Spain, Ferrández joined the Reina Sofía School of Music at thirteen. He then completed his studies at the Kronberg Academy with Frans Helmerson. He is a prize winner at the Tchaikovsky Competition in 2015. He has performed with notable orchestras including the Los Angeles Philharmonic Orchestra, Bayersichen Rundfunk Symphony Orchestra, London Philharmonic, Academy of St. Martin in the Fields, etc. As a chamber musician, he frequently collaborates with such artists as Anne-Sophie Mutter, Janine Jansen, Vadim Repin, Martha Argerich, Gidon Kremer and Yuja Wang. In 2021 he released his debut album under SONY Classical, “Reflections”, which was praised with the Opus Klassik Award. In November 2022 he released his second album comprising Brahms Double Concerto, performed with Anne-Sophie Mutter, the Czech Philharmonic under Manfred Honeck.

ストラディヴァリウス 1696 年製チェロ「ロード・アイレスフォード」
Stradivarius 1696 Cello “Lord Aylesford”

イギリスのアマチュア奏者アイレスフォード卿が1780年代初期にイタリアの名高い音楽家のフェリーチェ・デ・ジャルディーニ（1716～1796）から購入し、その後アイレスフォード家に約100年間所有されていたことからこの名前が付けられた。1946年にはアメリカ・フィラデルフィア在住の世界的に著名なチェロ奏者グレゴール・ピアティゴルスキー（1903～1976）の手に渡り、1950年から1965年には巨匠ヤーノシュ・シュタルケル（1924～2013）によって演奏会や35枚のレコーディングのために使用された。

This cello was once owned by a well-known musician, Lord Aylesford of England, hence its name “Lord Aylesford”. He acquired this cello in early 1780s from the famous Italian violinist Felice de Giardini (1716-1796) and it was retained in the Aylesford family for almost 100 years. In 1946 it was passed into the hands of the world-renowned cellist Gregor Piatigorsky (1903-1976) in Philadelphia, USA. During the years between 1950 and 1965, internationally acclaimed cellist, Janos Starker (1924-2013), played it in numerous concerts and made 35 recordings.

江口　玲（ピアノ）

©Kunihisa Kobayashi

「非凡なる芸術性、円熟、知性」（ニューヨーク・タイムズ紙）と評される江口 玲は世界中の聴衆と批評家たちを魅了してきた。欧米及び日本をはじめとする各国でのリサイタルや室内楽、オーケストラとの共演の他、ギル・シャハム、渡辺玲子、竹澤恭子、アン・アキコ・マイヤース等、数多くのヴァイオリニストたちとも定期的に共演。レコーディングでも高い評価を得ており、40を超える録音がドイツ・グラモフォン、フィリップスから出ている。現在は東京、ニューヨークと二つの拠点を行き来し、国際的な活躍を続ける。作曲・編曲者としても実力を備えた大胆な解釈と表現技法で国内外を問わず活躍を続けている。洗足学園音楽大学大学院客員教授、東京藝術大学ピアノ科教授。東京公演では、タカギクラヴィア株式会社所有の1887 年製 NY スタインウェイ《ローズウッド》を使用する。

Akira Eguchi, piano

Acclaimed for his extraordinary artistry, maturity and intelligence, (New York Times) Eguchi has captivated audiences and critics throughout the world. As a soloist and recitalist, he has performed in the foremost music centers of the United States, Europe, and the Far East. In great demand as a chamber musician, he has performed renowned violinist such as Gil Shaham, Reiko Watanabe, Kyoko Takezawa and Anne Akiko Meyers. More than 40 discs are available from Deutsche Grammophon, Philips, etc. Currently, he travels back and forth between Tokyo and New York and continues to be active internationally. As a composer and arranger, he continues to be active both in Japan and abroad with his bold interpretations and expressive techniques.
He is a guest professor of Senzoku-Gakuen Music College in Japan and professor at Tokyo National University of the Arts. For the Tokyo concert, Eguchi performs on the 1887 New York Steinway “Rosewood” owned by Takagi Klavier, Ltd.

【大 阪】主催：日本音楽財団
住友生命いずみホール［一般財団法人住友生命福祉文化財団］
共催：社会福祉法人日本ライトハウス
助成：日本財団

【東 京】主催：日本音楽財団、日本製鉄文化財団
助成：日本財団
協力：タカギクラヴィア株式会社